

## 「感動した建築について」

cp20050 河野圭祐

私は普通科高校を出身して、今まで建築をそこまで深く意識してきたわけではなく、建築士である祖父母に憧れて建築の世界に進もうと思い、本学科に進学した。建築デザイン学科での様々な授業や個人的に雑誌やインターネットを利用して、建築を学び始めたこの一年弱の期間で少ないながらも有名建築について触れてきた。その中で、個人的に感銘を受けた作品について述べていく。

1952年にル・コルビジェによってフランスのマルセイユに建てられた『ユニテ・ダビタシオン』。この建物の大まか特徴は1階がピロティ支柱構造の18階、337戸の大きな集合住宅であり、屋上庭園、保育園、体育館、サイクリングコース(トラック)、コミュニティスペース、水遊び場などがあり、現在ではホテル、レストラン、郵便局などもある。そして大きな特徴として、居住スペースがあげられる。住戸はメゾネットタイプ(1住戸が2層以上で構成)となっているが、ただロフトのような2層構造になっているのではなく、1Fが広く2Fが狭い住戸の次は1Fが狭く2Fが広い住戸が組み合うようになっていて、各住戸の中でリビングに〈上がる〉部屋もあれば、〈降りる〉部屋もあるという作りになっている。『ユニテ・ダビタシオン』は、ル・コルビジェが提唱した【輝く都市】という都市計画の概念を集合住宅として実現したといわれている。

私がこの『ユニテ・ダビタシオン』に感銘を受けた点は3つある。

1つ目は、この建物が竣工されたのが1952年であるということである。先に特徴として述べた通り、住居・共用施設・サービス施設等といった構造的・機能的・芸術的に発展した建物が戦後の1952年には建造されていたということにとっても感動した。

2つ目は、近代の巨匠ル・コルビジェの圧倒的なまでの技量と建設した背景について。これについては、『ユニテ・ダビタシオン』の構造・施設・規模等は言わずもがなで、『ユニテ・ダビタシオン』というこの圧巻の建物をフランスに4つドイツに1つの計5つも建立しているという事実もまた驚かされる。このことはただ文的な要素だけでなく、バックグラウンドとしても意味がある。この『ユニテ・ダビタシオン』がドイツ・ベルリンに建設されるきっかけになったのは、1957年にベルリンのハンザ地区で開催された国際建築展であった。この国際建築展にはル・コルビジェのほかに、グロピウスやアアルトをはじめとする13か国53名の世界的有名建築家が参加し、国際コンペという形で近代的な集合住宅が彼らによって建てられていった。戦後の街の復興を象徴するイベントでもあったため、フランス人であるル・コルビジェが参加することは単に彼の名声によるものだけでなく、数百年間「敵対関係」にあったフランスとドイツの和解も意味していたという。このようなバックグラウンドもありとても驚いた。

3つ目は、ただ『ユニテ・ダビタシオン』という建築について感銘を受けるのではなく、

この建築に触れて、感動して、調べていくにつれ「建築」という学問・分野そのものに深く感銘を受けた。この『ユニテ・ダビタシオン』から建築の可能性を大いに感じ取ったということだ。この画期的な建物とそれが竣工された時代1952年の《世界》の関係・進歩を見てみるととても興味を惹かれるものがあった。日本は木造の建物がベースかつ敗戦後の少ない材料での狭小住宅、アジアの周辺諸国やアフリカのほとんどの国では植民地問題に紛糾しとても建築についての発展などなく、世界中が戦後の復旧・復興に目を向けていた時に、ヨーロッパでは大きな集合住宅を建設している。数学・物理の公式や歴史といった学問・分野は誰かが発明・発見すると全世界で共有の情報になる。しかし、建築という分野は存在する国・地域によって“発展していく進歩”も“発展していった形”も多様であり、絶対に統一されることがない。それは、材料的・費用的・気候的な問題がありながらも、《形》として歴史を残してきた「建築」ならではのことであろう。ここまでの考察・意見を持てたのは近代の巨匠ル・コルビジェによって、第二次世界大戦後という世界的な大きな節目に、当時としては画期的で今なお語り継がれる構造的・機能的・芸術性を持ち、敵対国との亀裂の修復の発端に「建築」という学問・分野がなりうることを示して建てられた『ユニテ・ダビタシオン』によって、これほどの建築の可能性について思い知らされたからである。

最後に、ここまでの考察・調査ができた『ユニテ・ダビタシオン』（マルセイユ）は現在住居のほかにもホテルとして運営されており、また見学コースも実施しているので新型コロナウイルス感染拡大問題が落ち着き、渡欧ができるようになればぜひとも行ってみたい。一つの建築の構造的・機能的・芸術性・歴史等のバックグラウンドから「建築」の片鱗に触れられるためにも、多くの建築に触れていくべきだと私は思う。